

じいさんばあさん

森鷗外

青空文庫

文化六年の春が暮れて行く頃であつた。麻布竜土町あざぶりゆうどちようの、今
 歩兵第三聯隊れんたいの兵営になつてゐる地所の南隣で、三河国奥みかわのくにおく
 殿のの領主松平左七郎乗義のりのぶと云う大名の邸やしきうちの中に、大工が這入はい
 つて小さい明家あきやを修復してゐる。近所のものが誰の住まいになる
 のだと云つて聞けば、松平の家中さむらいの土で、宮重久右衛門みやしげきゆうえもんと云う
 人が隠居所こしちやを拵こしらえるのだと云うことである。なる程宮重の家の離
 座敷と云つても好いような明家で、只台所だけが、小さいながら
 に、別に出来ていたのである。近所のものが、そんなら久右衛門
 さんが隠居しなさるのだらうかと云つて聞けば、そうではないそ
 うである。田舎いなかにいた久右衛門さんの兄あなきが出て来て這入るのだ

と云うことである。

四月五日に、まだ壁が乾き切らぬと云うのに、果して見知らぬ爺じいいさんが小さい荷物を持って、宮重方に著ついて、すぐに隠居所に這入った。久右衛門は胡麻塩頭ごましおあたまをしているのに、この爺いさんは髪が真白である。それでも腰などは少しも曲がっていない。結構こしらえな拵の両刀を挿さした姿がなかなか立派である。どう見ても田舎者らしくはない。

爺いさんが隠居所に這入ってから二三日立つと、そこへ婆ばあさんが一人来て同居した。それも真白な髪を小さい丸まるまげ髷まげに結いついで、爺いさんに負けぬように品格が好い。それまでは久右衛門方の勝手から膳を運んでいたのに、婆あさんが来て、爺いさんと

自分との食べる物を、子供がまま事をするような工合に拵えることになつた。

この翁おうおん媪二人の中の好いことは無類である。近所のものは、若もしあれが若い男女であつたら、どうも平気で見ていることが出来まいなどと云つた。中には、あれは夫婦ではあるまい、兄きょうだ妹い、だろつと云うものもあつた。その理由とする所を聞けば、あの二人は隔てのない中うちに礼儀があつて、夫婦にしては、少し遠慮をし過ぎていゝるようだと云うのであつた。

二人は富裕とは見えない。しかし不自由はせぬらしく、又久右衛門に累を及ぼすような事もないらしい。殊ことに婆あさんの方は、跡あとから大分荷物が来て、衣類なんぞは立派な物を持つていゝるよう

である。荷物が来てから間もなく、誰が言い出したか、あの婆あさんは御殿女中をしたものだと言う噂わさが、近所に広まった。

二人の生活はいかにも隠居らしい、気楽な生活である。爺いさんは眼鏡を掛けて本を読む。細字で日記を附ける。毎日同じ時刻に刀剣うちこに打粉うちこを打って拭ふく。体たいを極きめて木刀を揮ふる。婆あさんは例のまま事の真似をして、その隙すきには爺いさんの傍そばに来て団扇うちわであおぐ。もう時候がそろそろ暑くなる頃だからである。婆あさんが暫しばらくあおぐうちに、爺いさんは読みさした本を置いて話をし出す。二人はさも楽しそうに話すのである。

どうかすると二人で朝早くから出掛けることがある。最初に出ことばて行った跡で、久右衛門の女房が近所のものに話したと言う詞ことばが

偶然伝えられた。「あれは菩提所ぼだいしよの松泉寺しやうせんじへ行きなすつたのでございます。息子さんが生きていなさると、今年三十九になりなさるのだから、立派な男盛と云うものでございますのに」と云つたと云うのである。松泉寺と云うのは、今の青山御所あおやまごしよの向裏むこうに当る、赤坂黒鋤谷くろくわだにの寺である。これを聞いて近所のは、二人が出歩くのは、最初のその日に限らず、過ぎ去つた昔の夢の迹あとを辿たどるのであらうと察した。

とかくするうちに夏が過ぎ秋が過ぎた。もう物珍らしげに爺いさん婆あさんの噂をするものもなくなつた。所が、もう年が押し詰まつて十二月二十八日となつて、きのうの大雪の跡の道を、江戸城へ往反おうへんする、歳暮拝賀の大小名諸役人織るが如き最中に、

宮重の隠居所にいる婆あさんが、今お城から下がったばかりの、邸の主人松平左七郎に広間へ呼び出されて、將軍徳川家いえなり齊の命を伝えられた。「永年遠えんごく国に罷まかり在あり候おつと夫ための為、貞節を尽つくし候そろおもむききこしめ趣おほしめし聞もつ召ほうびされ、厚おほしめしき思もつ召ほうびを以て褒美として銀十枚下し置かる」と云う口上であつた。

今年の暮には、西丸にいた大納言家いえよし慶ありすがわよしひとしんのうと有栖川職仁親王じよらくみやの女樂宮との婚儀などがあつたので、頂ちようだいもの戴物にんずをする人数が例年よりも多かつたが、宮重の隠居所の婆あさんに銀十枚を下さつただけは、異数いすうとして世間に評判せられた。

これがために宮重の隠居所の翁媪二人は、一時江戸に名高くなつた。爺いさんは元大番いしかわあわのかみふさつねくみみのべいおり石川阿波守総恒組美濃部伊織と云つて、

宮重久右衛門の実兄である。婆あさんは伊織の妻るんと云つて、
そとさくらだ外桜田の黒田家の奥に仕えて表おもてづかい使格かくになつていた女中
 ある。るんが褒美を貰つた時、夫伊織は七十二歳、るん自身は七
 十一歳であつた。

明和三年におおぼんがしら大番頭おぼんがしらになつた石川阿波守総恒の組に、美濃部
 伊織と云う土さむらいがあつた。剣術はせいはい儕輩せいはいを抜いていて、手跡も好く
 和歌の嗜たしなみもあつた。石川の邸は水道橋外で、今白はくさん山はくさんから来る電
 車あたりが、お茶の水を降りて来る電車と行き逢う辺の角屋敷かどやしきになつ

で落ち合うのみであった。
 石川が大番頭になった年の翌年の春、伊織の叔母婿おばむこで、やはり

大番を勤めている山中藤右衛門と云うのが、丁度三十歳になる伊織に妻を世話をした。それは山中の妻の親戚しんせきに、戸田淡路守あわじのかみ氏うじゆき之の家来有竹某ありたけぼうと云うものがあつて、その有竹のよめの姉を世話したのである。

なぜ妹が先によめに往いつて、姉が残っていたかと云うと、それは姉が邸奉公をしていたからである。素二人もとの女は安房国朝夷あわのくにあさいご郡真門村おりまかどむらで由緒のある内木四郎右衛門うちきしるえもんと云うものの娘で、姉のほうれきるんは宝曆二年十四歳で、市ヶ谷門外の尾張中納言宗勝おわりちゆうなごんむねかつの

奥の軽い召使になつた。それから宝暦十一年尾州家では代だいがわ替かりがあつて、宗睦むねちかの世になつたが、るんは続いて奉公して、とうとう明和三年まで十四年間勤めた。その留守に妹は戸田の家来有竹の息子の妻になつて、外桜田の邸へ来たのである。

尾州家から下がつたるんは二十九歳で、二十四歳になる妹の所へ手助てだすけに入り込んで、なるべくお旗本うちの中で相応な家へよめに往きたいと云つていた。それを山中が聞いて、伊織に世話をしようと言つと、有竹では喜んで親元になつて嫁入をさせることにした。そこで房州ぼうしゅううまれの内木氏うちのるんは有竹氏を冒おかして、外桜田の戸田邸から番町の美濃部方へよめに来たのである。

るんは美人と云う性たちの女ではない。若もし床の間の置物のような

物を美人としたら、るんは調法に出来た器具のような物であろう。体格が好く、押出しが立派で、それで目から鼻へ抜けるように賢く、いつでもぼんやりして手を明けていると云うことがない。顔もかんこつ観骨がやや稍出張っているのがきず疵であるが、まゆ眉や目の間に才気があふ溢れて見える。伊織は武芸が出来、学問の嗜もあつて、色の白い美男である。只この人にはかんしやくもち肝癪持と云う病があるだけである。さて二人が夫婦になつたところが、るんはひどく夫を好いて、手に据えるように大切にし、七十八歳になる夫の祖母にも、血を分けたものも及ばぬ程やさしくするので、伊織は好い女房を持ったと思つて満足した。それで不断の肝癪は全くあと迹をおさ斂めて、何事も勘弁するようになっていた。

翌年は明和五年で伊織の弟宮重はまだ七五郎と云っていたが、
主家しゅうけのその時の当主松平石見守乗穩いわみのかみのりやすが大番頭になったので、
自分も同時に大番組に入いった。これで伊織、七五郎の兄弟は同じ
勤をすることになったのである。

この大番と云う役には、京都二条の城と大坂の城とに交代して
詰めることがある。伊織が妻を娶めとつてから四年立つて、明和八年
に松平石見守が二条在番の事になった。そこで宮重七五郎が上京
しなくてはならぬのに病氣であつた。当時は代人だいにん差立さしたてと云う
ことが出来たので、伊織が七五郎の代人として石見守に附いて上
京することになった。伊織は、丁度妊にん娠しんして臨月になっている
るんを江戸に残して、明和八年四月に京都へ立った。

伊織は京都でその年の夏を無事に勤めたが、秋風の立ち初^そめる頃、或る日寺町通の刀剣商の店で、質流れだと云う好い古刀を見出した。兼^{かね}て好い刀が一腰^{こし}欲しいと心掛けていたので、それを買いたく思ったが、代金百五十両と云うのが、伊織の身に取つては容易ならぬ大金であつた。

伊織は万一の時の用心に、いつも百両の金を胴巻に入れて体に附けていた。それを出すのは惜しくはない。しかし跡五十両の才覚が出来ない。そこで百五十両は高くはないと思ひながら、商人にいろいろ説いて、とうとう百三十両までに負けて貰うことにして、買い取る約束をした。三十両は借財をする積^{つも}なのである。

伊織が金を借りた人は相^{あい}番^{ばん}の下^{しも}島^{じま}甚右衛門と云うものであ

る。平生親しくはせぬが、工面くめんの好いと云うことを聞いていた。そこでこの下島に三十両借りて刀を手に入れ、拵えを直しに遣やつた。

そのうち刀が出来て来たので、伊織はひどく嬉しく思つて、あたかも好し八月十五夜に、親しい友達柳原小兵衛等二三人を招いて、刀の披露ひろう旁馳走かたがたちそうをした。友達は皆刀を褒ほめた。酒酣たけなわになつた頃、ふと下島がその席へ来合せた。めつたに来ぬ人なので、伊織は金の催促に来たのではないかと、先まず不快に思つた。しかし金を借りた義理があるので、杯さかずきをさして団欒まといに入れた。

暫しばらく話をしていううちに、下島の詞ことばに何となく角があるのに、一同気が附いた。下島は金の催促に来たのではないが、自分の用

立てた金で買った刀の披露をするのに自分を招かぬのを不平に思つて、わざと酒宴の最中に尋ねて来たのである。

下島は二言ふたこと三言みこと伊織と言ひ合つているうちに、とうとうこう云う事を言つた。「刀は御奉公のために大切な品だから、随分借財をして買つても好かろう。しかしそれに結構な拵をするのは贅ぜい沢いたくだ。その上借財のある身分で刀の披露をしたり、月見をしたりするのは不心得だ」と云つた。

この詞の意味よりも、下島の冷笑を帯びた語気が、いかにも聞き苦しかったので、俯向うつむいて聞いていた伊織は勿論もちろん、一座の友達ともが皆不快に思つた。

伊織は顔を挙げて云つた。「只今のお詞は確に承つた。その御

返事はいずれ恩借の金子きんすを持参した上で、改あらためて申上げる。親しい間柄と云いながら、今晚わざわざ請待した客の手前がある。どうぞこの席はこれでお立下されい」と云った。

下島は面かおいろ色いろが変った。「そうか。返れと云うなら返る。」こう言い放つて立ちしなに、下島は自分の前に据えてあつた膳を蹴け返かえした。

「これは」と云つて、伊織は傍はたにあつた刀を取つて立つた。伊織の面色はこの時變つていた。

伊織と下島とが向き合つて立つて、二人が目と目を見合わせた時、下島が一言「たわけ」と叫んだ。その声と共に、伊織の手に白刃しらばが閃ひらめいて、下島は額とうを一刀切られた。

下島は切られながら刀を抜いたが、伊織に刃向うかと思うと、
そうでなく、白刃を提ひっさげたまま、身を翻ひるがえして玄関へ逃げた。

伊織が続いて出ると、脇差を抜いた下島の仲ちゆうげん間まが立ち塞ふさが
つた。「退のけ」と叫んだ伊織の横に払った刀に仲間まは腕を切られ
て後へ引いた。

その隙ひまに下島との間に距離が生じたので、伊織が一ひととび飛とびに追い
継すがろうとした時、跡から附ついて来た柳原小兵衛が、「逃にげるなら
逃にがせい」と云いつつ、背後うしろからしつかり抱き締めた。相手が死
なずに済んだなら、伊織の罪が軽減せられるだろうと思つたから
である。

伊織は刀を柳原にわたして、しおしおと座に返つた。そして黙

つて俯向いた。

柳原は伊織の向いにすわつて云つた。「今晚の事は己おれを始、一同が見ていた。いかにも勘弁出来ぬと云えばそれまでだ。しかし先へ刀を抜いた所存を、一応聞いて置きたい」と云つた。

伊織は目に涙を浮べて暫く答えずにいたが、口を開いて一首の歌を誦じゆした。

「いまさらに何なにとか云はむ黒くろ髪かみの

みだれ心はもとすゑもなし」

下島は額の創きずが存外重くて、二三日立つて死んだ。伊織は江戸へ護送せられて取調を受けた。判決は「心得違かどの廉かどを以て、知ちぎよ行う召放され、有馬ありまさ左兵衛ひょうえ佐允すけまさ純ずみへ永ながの御預仰付らる」と云うことであつた。伊織が幸さいわい橋いばし外そとの有馬邸から、越前えちぜん国のくに丸岡へ遣られたのは、安永と改元せられた翌年の八月である。

跡に残つた美濃部家の家族は、それぞれ親類が引き取つた。伊織の祖母ていししょういん貞松院ていしょういんは宮重七五郎方に行き、父の顔を見ることの出来なかつた嫡子へいない平内へいないと、妻るんとは有竹の分家になつている笠原新八郎方に往つた。

二年程立つて、貞松院が寂しがつてよめの所へ一しよになつたが、間もなく八十三歳で、病氣と云う程の容ようだい体たいもなく死んだ。

安永三年八月二十九日の事である。

翌年又五歳になる平内が流行の疱瘡ほうそうで死んだ。これは安永四年三月二十八日の事である。

るんは祖母をも息子をも、力の限介かぎり抱して臨終を見届け、松泉寺に葬った。そこでるんは一生武家奉公をしようと思ひ立つて、

世話になつてゐる笠原を始、親類に奉公先を捜すことを頼んだ。

暫く立つと、有竹氏の主家しゅうけ戸田淡路守氏うじやす養の隣邸、筑前ちくぜんのくに

国福岡の領主黒田家の当主松平筑前守治はるゆき之の奥で、物馴れた

女中を欲しがつてゐると云う噂が聞えた。笠原は人を頼んで、そこへるんを目見えめみに遣つた。氏養と云うのは、六年前に氏之の跡を続ついだ戸田家の当主である。

黒田家ではるんを一目見て、すぐに雇い入れた。これが安永六年の春であった。

るんはこれから文化五年七月まで、三十一年間黒田家に勤めていて、治之はるゆき、治高はるたか、斉隆なりたか、斉清なりきよの四代の奥方に仕え、表おもてづかいかく使格しやくに進められ、隠居して終身二人扶持にんふちを貰うことになった。この間るんは給料の中から松泉寺へ金を納めて、美濃部家の墓こうげに香華こうげを絶やさなかつた。

隠居を許された時、るんは一旦笠原方へ引き取ったが、間もなく故郷の安房へ帰った。当時の朝夷郡真門村で、今の安房郡江見えみ村むらである。

その翌年の文化六年に、越前国丸岡の配所で、安永元年から三

十七年間、人に手跡や剣術を教えて暮っていた夫伊織が、「三月八日、しゅんめい俊明いんてん院殿ごついでん御追善ぜんの為、御慈悲の思召を以て、永ながの御おあず預けごめん御免おおせ仰い出いだされ」て、江戸へ帰ることになった。それを聞いたるんは、喜んで安房から江戸へ来て、竜土町の家で、三十七年振に再会したのである。

青空文庫情報

底本：「阿部一族・舞姫」新潮文庫、新潮社

1968（昭和43）年4月20日発行

1985（昭和60）年5月20日36刷改版

1994（平成6）年12月15日54刷

入力：蔣龍

校正：noriko saito

2005年1月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

じいさんばあさん

森鷗外

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>